

児童文学春学期リーグ戦総括

中島 信子

四月十八日(木)の手帳メモ欄に「花曇り少々寒い。しかし驚いた。ほとんどが四大大生であった」と記してある。この日は十四

年度春期の初講義だった。児童文学は互換授業で十人枠で四大大生を、短大は他科の学生も受け入れていた。ところが、その四大大生の十人枠がいつの間にかはずされていった。

「今年は何人くるかなあ」

四大大生の男子学生が一人でも入ると、微妙に女子学生の雰囲気がいや方向に違う。それでは例年通りそう呑気に思っていた。

さて当日、昼休み中から講師控室前の廊下が多くの学生でうるさくなっていた。まさかその学生達が自分の講義の学生達とは思いません、私は学生達を押しつけては授業準備の

ため往ったり来たりしていた。そしていよいよ授業へ。そこで口をあぐり開けてしまっ

た。文教短大も他短大と同様年々学生数が減少してきている。そのため、せいぜい三、四十人の学生数と見込んで授業計画を立てていた。小人数でゼミのようにじっくり課題を

討っていかれたらと思っていた。それが男子学生もやたらいるではないか。四大大生だけで八十名弱がやってきたのだ。ともかく全員が入れる教室を捜して二度も移動し、やっと階段教室に落ちついた。そこでなぜこうなったのかと思えば、講義概要には「ハリー・ポッター』『五体不満足』『星の王子さま』等々、児童文学のベストセラーを並べていたのだ。来

るわけである。テキストが悪かった。

しかし、四大大生と短大生の人数の逆転は思惑の講義内容でもたない。四大大生と短大生の年齢・意識・学んできた事柄の差は想像以上に大きい。それは数年に亘る互換授業で経験済みである。授業の焦点をどこに当てればよいのか、まして我モットーの面白い授業となると完全に授業内容の建て直しである。

その日からの一週間は、他の仕事を放り出し学生達の顔を思い浮かべながら計画を練った。そして考案したのが「児童文学春学期リーグ戦・別名ナカノブ戦・四点先取制」である。

どの学部も学生も平等に自己の考えを示せること。就職試験に役立つ書く力をつける。そして、私としてはできるだけ早く学生数を減らせたらという一石三鳥の苦肉の策である。要するに毎授業テキストから出す設問に原稿用紙一枚以内で回答するもので、私がある原稿内容に負けたと思つたら一点をつける。四点獲得すればその段階で全授業最高点での出席とみなし、以後はこなくてよいとした。

五十分を講義に、四十分を原稿を書く時間とし、誤字脱字はあえてチェックせず、自身

に正直であり、オリジナル原稿・時間内提出を基本ルールとした。

4/25 『はっぱのフレディー』『子いぬのうんち』をテキスト。「輪廻転生」の具体例とは。

5/9 『ハリー・ポッター』I テキストには描かれていない³₄番線ホームへの「時空の旅」を想像して。

5/16 『ハリ・ポタ』II クイディッチゲームから「ボールを使った二人以上のゲーム」の考案・図案でもよし。

5/23 『ハリ・ポタ』III ホグワーツ校よりさらなる魅力ある学校を「頑固で孤独な八十歳を誘える言葉と学校」とは。

5/30 『五体不満足』 現時点で五感のうち一つの感覚を二〇%のみ残して喪失したとしたら「どの感覚をなぜ残したいか」

6/6 『星の王子さま』 自分を六歳の兄か姉とし、三歳の弟か妹と砂漠に取り残されたとしたらその「生への励まし」の行動と言葉

6/13 『グリム童話』I 物語に潜む残酷性から「今までで一番恐怖だったことは」

6/20 『グリム童話』II 伝承された背景の中世ヨーロッパの現実から「二十四時間しか生きられないとしたら最後の時をどう過ごすか」

6/27 『しろうさぎ・くろいうさぎ』 親子恋人等への「信念としての愛の定義」

7/4 『天までとどけ』 過去における絶望状態を希望へと転化させた「心の軌跡」

7/11 児童文学なんでも回答。
以上リーグ戦、いざ開始してみると私側に並みの講義の数倍のエネルギーが必要となった。テキスト内容とその解説はともかく、テーマを認識させる事と毎回全員の原稿を持ち帰り二、三回読む事は大変な作業だった。こちらも意地のようにそうは簡単に点を獲られてなるものかとなり、一方原稿をほとんど書いたことのない学生も点欲しさに頭をひねり、アイディア一発勝負をしてくる。「輪廻転生」ではひとりも得点できなかったが「ボールを使った二人以上でするゲーム」は全員

得点した。なにしろゲーム世代、百三十以上ものオリジナルゲームが出揃った。生命がけすぎるゲームも多々あったが、それも面白くまた実際にできるであろうゲームもあった。

授業開始と同時に前回の得点者名を読み上げため遅刻者は激減した。最初は相談しあっていた男子学生達もほとんどしゃべらなくなった。書く事の面白さとゲーム的な要素の面白さから回を追うことに学生達の目の色が

違ってきた。授業後には得点を確認する学生が教壇の周りに群れるようになった。得点した際のうれしそうなどよめきは、こちらの心も豊かにしてくれた。

原稿内容は「五感喪失」が感動的であった。二十%残すひとつの感覚を私は勝手に視覚・聴覚・触覚と順位づけていたが、百十一名の学生のうち、触覚を三十六名が残した。視覚より十名少なくて聴覚より二十名多い数である。(見えなくとも聞こえなくとも誰かに触れていれば生きていける)と男女共に書いている。「恐怖体験」では十数名の女子学生が変質者との遭遇を「残り二十四時間の生き方」では男女二人ずつが(人を殺してから死にたい)と書いた。どれも正直な原稿と理解した。

一番最初の四点獲得は五月三十日に出たが、その後点を得ても学生数はあまり減らなかった。書く事に目覚めた学生が居残ったためである。そして、私の手元に宝物のように学生達の飾らない心の内が千枚の原稿として残った。

やはり若者はすばらしい。この出会いを一生忘れないで生きていこうと思うほどに。